No.154
公民館だより
平成27年7月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

在職十年を振り返る（五）

由良地区公民館長　枝川隆亮

◎平成二十三（二〇一一）年

この年、日本海側で記録的な大雪が襲い1月の積雪は全国観測地点37ヶ所で最大積雪量の更新をする寒波の到来でした。

地区内に積もった雪は40センチを超え、久しぶりの除雪に汗をかきました。

海外でもヨーロッパでは歴史的な寒波に襲われ、オーストラリアでは被害が深刻化しています。世界中で大荒れの天気となっている異常気象は最大規模といわれるラニーニャ現象と、北極から大量の寒気の南下や東から西へと流れる偏西風が原因とされています。この年の「生涯学習講座」で講師の気象予報士堀口善一先生は、「やさしい気象学」の中で、北極圏で寒気の蓄積と放出を繰り返す「北極振動」はこの年放出期であり寒帯亜熱帯2つの偏西風の蛇行で南に曲がった日本に寒気が入りやすいと解説されています。

ラニーニャ現象の発生も地球温暖化が起因とされており、私たちはＣＯ２（二酸化炭素）の削減に努めなくてはなりません。

3月11日14時46分、三陸沖を震源とする大地震があり宮城県栗原市で震度7を観測。

また北海道から九州にかけての広い範囲で震度6強から1の揺れに見舞われています。この大地震により巨大津波が発生、東北地方を直撃しました。

その後も度重なる余震などで重大な被害が発生しています。

15時42分東京電力福島第一原発1・2号機で炉心を冷やす緊急炉心冷却システムが動かなくなり、翌12日に第一原発で水素爆発が発生、半径20キロに避難指示が出されました。

14日には3号機でも水素爆発、計画的な停電を余儀なくされ東北地方各地では長時間にわたり大混乱が生じています。

地震の規模は9.0に訂正され、関東大震災の約45倍、阪神大震災の約１４５０倍とされています。津波での浸水面積は青森から福島までの分で東京23区の面積の約8割と国土地理院が発表しています。

救出された人は警察・消防・自衛隊などで2万６６６６人、日本政府は43の国・地域・国際機関から援助物資を受け、また24の国・地域・国際機関から援助隊を受け入れています。

在日米軍は、2万人態勢で最大級災害支援の「トモダチ作戦」の実施を行っています。

米国航空宇宙局では、この地震の発生で地球がわずかに変形し自転が速まったため１００万分の1.8秒1日の長さが短縮したと発表しています。

多数の人命を奪った原因は津波であった。日本地理学会の分析によると、とくに奥行きが浅い湾や切り立った海岸の谷で、津波が高くなったと発表しています。福島第一原発では想定をはるかに超える大津波の襲来により、原子炉や使用済み燃料の冷却機能が失われ、重大事故に至りました。広範囲の放射能流出による海洋汚染が発生しており、いまだに汚染水流出が止まっていないのは大問題であります。すべての面で、いち早く復興が解決してもらいたいと考えています。

（以下次号）

行事報告

主事　千坂幸雄

◎四月二十九日（水）昭和の日 由良ヶ嶽登山

澄み切った青空が広がる絶好のコンディションの下、由良ヶ嶽登山を実施いたしました。

はまの子グランドに八時すぎ頃から登山者が集まりだし、八時三十分に公民館長があいさつと登山の心得を述べました。その後、ラジオ体操をしました。子供たちにはおやつが配られ、嬉しそうにしていました。

この日には百六十九名の方に登山証明書を渡すことができました。四歳から八十歳代の方までおられました。中学生以下の子供たちの参加が思った以上に多く、小学校がなくなって子供の声を聴く機会が少ない中で久しぶりに元気な声を聴くことができました。前日に遠足があったと聞きましたが、子供たちは駆け足で登っていきました。やはり子供は元気です。

会社仲間や家族、登山同好会らしき人などいろんなつながりの人たちが声を掛け合いながら、そして、相手を気遣いながら思い思いのペースで炭焼き窯跡・一杯水・鞍部などで休憩をとりながら登っていきました。

四歳の子供を連れたお父さんは、肩車をしたり、歩かせたりしながら丈夫な子になるようにと子供に声をかけていました。

山道は、毎年見られる三つ葉つつじ・山桜・もくれんなどの花はすでに散り、新緑一色に囲まれていました。

山頂では、家族や仲間と弁当を食べたり、景色を眺めたりしながら楽しいひと時を過ごしていました。

東峰からの景色は、由良の集落から由良川・神崎・西舞鶴・青葉山などの山々が三百六十度見渡せました。

標高六百四十メートルの西峰からの景色は、栗田地区から宮津・天橋立・府中地区・日置地区・伊根湾まで、よく見渡すことができました。前日、宮津森林組合に大きな木を伐採していただいたことや天気が良かったことで大変良い見晴らしでした。

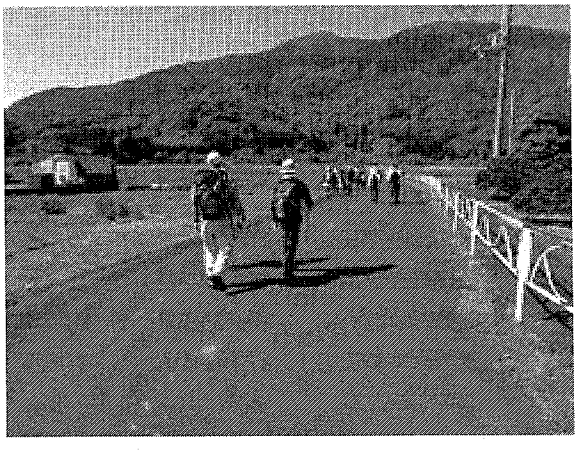
下山中に、舞鶴漆原方面から登ってきて由良に下りる人に出会いました。その人は息一つ切らさずに駆け足で下りていきました。こんな人もいるのか、自分ももっと元気にならなくてはと思いました。

四月二十三日（木）、公民館、由良自治連合会、由良観光組合、計十三名の人たちに登山道の倒木除去作業や東西の山頂の草刈をお世話になりました。ありがとうございました。

追記

由良ヶ嶽東峰山頂に虚空蔵菩薩が鎮座している祠があります。由良ヶ嶽に虚空蔵菩薩が鎮座したのは、奈良時代だそうです。そのころから人々は由良ヶ嶽に登っていたということです。昔は毎年三月十三日に虚空蔵菩薩の例祭が由良ヶ嶽の山頂で行われたそうです。

登山口にある小屋の中に、由良ヶ嶽と虚空蔵菩薩の説明書や登山証明書が置いてあります。ご活用ください。



主事就任のごあいさつ

千坂幸雄

日ごとに夏を思わせる暑さが増してきていますが、皆様には、お元気に過ごされていることとお喜び申し上げます。

さて、この度、前主事、磯田充亮氏の後任として由良地区公民館主事に就任いたしました。

私は、体育部長や分館長をしてきましたが、その任務が果たせてきたのは館長や主事が下ごしらえをしていただいているからということをひしひしと感じています。

由良地区公民館は、優良公民館として全国表彰を受賞している伝統ある公民館です。この伝統をこれから支えていかねばならないと思うと大変なことを引き受けたものです。

微力な私に務まるかどうかわかりませんが、枝川館長、磯田前主事のご指導の下、頑張らせていただきます。

公民館の仕事は、地区の人たちが生き生きと健康で心豊かに生活していただけるように、体を動かしたり教養を身につけたりする機会を設けて地区の人たちが交流していただけるようにすることと思っています。

由良小学校が閉校し、子供たちの活動が見えなくなっています。子供と大人の交流の場を増やすことも必要です。幼稚園の周りの草引きをしている方と話をする機会がありました。「使わないと荒れるばかりなので良い使い道がないのでしょうか。」と

運動会、その他どんなことでも各地区の公民館役員に話していただいて役員会の時にその意見が反映できれば幸いです。

辞任にあたり

磯田充亮

恒例の由良が岳登山に今回も同行し、晴天の下青葉茂る山道を登り、地元の人をはじめ近隣から来られた多くの人たちに出合う事が出来ました。今回は、特に整備された西峰から見る「天の橋立」は絶景でした。

さて、私儀この度平成二十七年四月末をもちまして、由良地区公民館主事を退任させていただくことになりました。

在任中は地域の皆様の温かいご支援と助言を賜り、十年間にわたり公民館活動に携わり今日を迎えました。

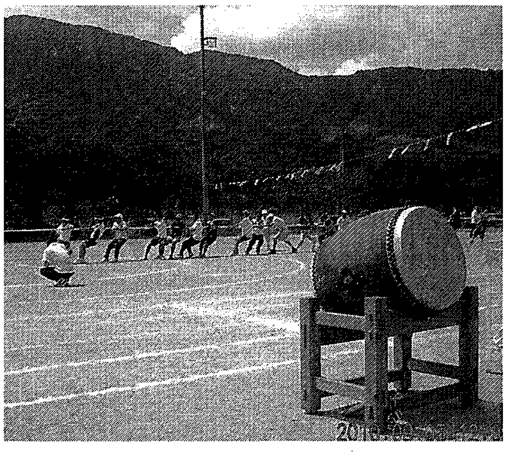
その間、貴重な体験をさせていただき深く感謝し厚くお礼申しあげます。

特に、台風・大雪等異常気象後に由良が岳登山道の整備の下見に登ったこと、酷暑に開催した運動会、雨の中での「てんころレース」、又、館長の下で「由良の歴史」の編纂、小学校閉校に伴う記念誌の発行等思い出します。

又、桂冠後の素行も評価され叙勲を受章したことです。

これも皆様方のお蔭の賜物と深く感謝いたしております。

今後は新しい役員のもと、由良地区公民館の更なるご発展と地域の皆様のご健勝を祈念申しあげまして辞任のご挨拶と致します。



平成二十七年度を迎え

宮津市立栗田小学校　校長　辻　村　眞　人

ふるさとの親すこやかに寿司の味

由良地区の皆様にはおかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申しあげます。

今年度の四月から新しく校長として、伊根小学校より赴任しました辻村眞人（まこと）と申します。どうかよろしくお願い致します。

六月になり学校の周りの山々も若葉の色から濃い緑色に変化し、各地では田植えや畑の植え付けも無事に終わり、由良や栗田の地も初夏の装いを感じる季節となりました。一年を通して、最も活動しやすく、過ごしやすい時期を迎えています。

さて、平成二十七年度は、由良地区の児童二十七名と栗田地区の児童八十六名を合わせた全校児童百十三名と教職員十九名でスタートを切りました。

昔から春を迎える様々な行事には、稲作を行ってきた人々の知恵や歴史が込められています。

春、山の神様「サ」を山の上からお迎えし、座して頂く木が「サクラ」。その後、村中の人達が総出で田植えを行うのですが、そこで活躍するのが若い女性の「早乙女」です。田植えの主役を女性に託したのは女性が生命を生み出すことのできる神秘さと、その生命力にあやかったものだと思います。そして早乙女達が手に持って植えるのが「早苗」です。

無事に田植えが終わると、村中が重労働に対して互いにご苦労様と労をねぎらうとともに、神様への感謝を込めて神様に再び山に帰って頂く大切な行事が「サノボリ（さなぼり）」です。

このように日本各地の村では春の苗の植え付けは神様の力もお借りする村の一大行事でありました。

現在では大型の田植機が四条、六条、八条と一気に植え付けていきますが、これも時代の流れかもしれません。けれども、田んぼや畑からの収穫物を大切に思う気持ちや感謝する気持ちは現在でも連綿と受け継がれています。

さて、今年度も栗田小学校では「**ふるさとに誇りを持ち、自ら学び、たくましく生きる子**」の学校教育目標を具現化するために、「知」・「徳」・「体」と「郷土愛」を育み、調和のとれた児童の育成に努めてまいりたいと思います。そのために、次のような重点目標を掲げ、学校経営を推進してまいります。

①「基礎・基本的な学習内容を身に付ける。」
②「心の教育を充実させ、相手を思いやる心を育む。」
③「心身共に健康な体づくりに努める。」
④「地域から信頼される学校づくりを行う。」
⑤「生活科の学習を通して表現力を育成する。」

これらの重点目標の達成を目指し、児童が生き生きと学び生活する活気あふれた学校づくりに向け、全教職員が一丸となって指導にあたる決意です。

特に、五つ目の生活科に関わっては、京都府小学校教育研究会の指定校として取組を進めていきます。活動や体験を通して、身近な人々や自然に関心を持たせ「児童の気付き」を大切にしながら、表現力の向上へと繋げたいと思います。地域の皆様どうかよろしくお願い致します。

平成二十七年度を迎え

宮津市立栗田中学校　校長　細見晋一

栗田中学校に赴任して二年目になります。昨年度は、由良公民館の関係の皆様を始め地域の皆様には、本校教育に絶大なる御理解と御支援を賜り誠にありがとうございました。

平成二十七年度は、全校生徒六十五名（由良地区十四名）でスタートしました。昨年の同時期より一名増になります。部活動は野球部、バレー部、ソフトテニス部（男女）の計四つに一年生がほぼ均等に分かれて入部し、四月の比較的早い時期から自主的に朝練習に参加し、一日でも早く先輩とともに試合に出たいという意欲的なところを見せてくれました。先輩が生き生きと後輩である一年生に教えている姿が、ほほえましく、学校生活を楽しい雰囲気にしてくれています。

今年度は特に、生徒が『自信と誇り』が持てる栗田中学校にしていきたいと思っています。

まず、三年生らしさが遺憾なく発揮され、リーダー学年として学校を牽引できること。その三年生とこの一年で大きく成長した二年生と意欲的な一年生が一つとなり、生徒会・委員会活動、部活動や陸上の大会でその能力を発揮できること。そのような学校になるために、教師が励ましたり褒めたりしながら適切に評価し、生徒に成功体験をたくさんさせ、自己肯定感や自己有用感を育てることが重要であると考えます。

ゴールデンウィーク中に開催された若丹バレーと宮津与謝野球連盟会長杯では、敗れはしましたが、三年生二年生そして一年生も試合に出て成果と課題が確認できた試合になりました。

また、五月九日に行われた阿蘇海一周マラソン大会（駅伝形式）では、選手全員がベストタイムを出し、補助員も含め栗田中学校のチームが一つの目標に向けまとまったよい大会になり、男子チームが三位入賞という良い結果を得ることができました。

今後も自分を高めチームでまとまるにはどうしたらよいか、大会に参加できる喜び等様々な机上では味わえない体験をし、各部活動の大会や陸上の大会で活躍してくれることを期待したいと思います。

一方、学習面では、まずは教師が授業力を向上させるために、気軽にお互いが授業を参観し、生徒が自主的に授業に向かうにはどのような働きかけをしたらよいか交流し、生徒の学びを深めるとともにやる気を伸ばし、また、御家庭の協力を得る中で家庭学習の充実を図って参りたいと思います。

さらに、本校では、ボランティア活動を行っております。今年も浜清掃と駅舎清掃を計画しております。特に十月に予定している駅舎清掃の時、由良駅舎清掃ボランティアの皆さんと一緒に活動をさせていただこうと思っています。よろしくお願いします。

また、今年度は、由良地区に昔から伝わる「山椒大夫（説教節）」を中学生が学び、朗読を発表できる機会を設けたいと考えています。

このようなことを始め、ふるさとに誇りが持てるよう「ふるさと学習」の講話、資源回収や体育後援会賛助会員、職場体験等地域の皆様に御協力をいただきながら、本校教育を一層推進していきたいと思います。これまで同様御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げ、挨拶にかえさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

栗田小学校PTA副会長　亀井 かをり

新緑が目に鮮やかな季節となり、一年を通してとても過ごしやすい時期となりました。

日頃より地区の皆様には、児童を温かく見守っていただき有難うございます。また、登下校の際には、由良子供安全見守隊の皆様、由良駐在所の小林様を中心に安心できる環境を作っていただき、大変ありがたく思っております。

この度、栗田小学校PTA副会長を縁あって務めさせていただくこととなり、緊張の中にも新鮮さを感じながら今こうしてペンを執っているのが不思議な気持ちです。

小学校にわが子がお世話になってから早いもので六年目、卒業の年になりました。大きな節目の年にPTA役員として行事に関わらせていただき、又、思い出づくりのお手伝いができることを嬉しく思っております。

さて、今年度の栗田小学校のスローガンは、『あいさつから始まる人と人とのつながり』です。あいさつは学校だけではなく、幼児から大人までその大切さを知っています。あいさつはコミュニケーションの入り口です。あいさつを交わすことから、人間関係がよくなり、つながりを築き、家庭、学校、地域が一体となって子供たちを育てていけると思っております。子供たちの元気な『行ってきます』『ただいま』の声に大人も元気や勇気というエネルギーをもらっています。

子供たちの環境もこの六年で大きく変化しましたが、新たな環境でたくさんの刺激を受けながら成長していく姿を見ると、母校が無くなった淋しい思いは消えませんが、多人数で学ぶ環境ができたことを感謝しております。

栗田のいいところを吸収し、由良のいいところは持続させ、素敵な由良の子に育ってほしいと願っております。

子供たちが成長していく過程で学校、親、友達から学ぶことはたくさんありますが、地域の皆様から学ぶことも大切なことだと思っております。地域の皆様には、今まで同様、子供たちを時には厳しく、時には優しく見守っていただきたく思います。

最後になりましたが、栗田小学校の皆さんが楽しく笑顔いっぱいの学校生活を送れるよう微力ながら一年間頑張らせていただきますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。

早速のお礼

栗田中学校ＰＴＡ副会長
体育後援会長　小室博嗣

新年度を迎え、早や二ヶ月が過ぎ、初夏を思わせる日々が続くことも多くなりました。

日頃は、栗田中学校ＰＴＡ活動にご理解・ご協力いただき、誠にありがとうございます。今年度のＰＴＡ副会長兼体育後援会長を務めさせていただくことになりました。恥ずかしながらＰＴＡ活動にあまり参加してこなかったため、よく分からず役員のみなさまにご迷惑をおかけしている次第です。

早速、５月には資源回収を実施しました。今では生徒数の減少に伴い、生徒の居ない地区もあり回収も大変になっています。そうした中でも、地域のみなさまのご協力を頂き無事終えることができました。

また、賛助会のお願いにおいても、近年ではお子様も中学校を卒業されたご家族が多い中、みなさまから多額のご支援を受け賜りました。この場をおかりして厚くお礼申し上げます。

ＰＴＡ・体育後援会活動においては、この資源回収と賛助会の収入を主軸として運営しているのが現状でございます。みなさまからご協力いただきました収益金を栗田中学校生徒達のこれからの教育・体育活動に活用させていただきます。

これからも、子供達が充実した日々を過ごせるとともに、大きく成長し活躍する姿を願いながら、今後とも栗田中学校ＰＴＡ活動へのご理解とご協力をお願いします。また今後の子供達の活動ぶりは中学校だよりにより随時、ご報告いたしますので、ご覧頂けると、子供達の励みにもなりますので御一読ください。

就任のごあいさつ

由良子供会連絡協議会 会長　浪江晃太

由良地区の皆様には日頃より子供会の活動に、暖かいご支援とご協力を頂き、本当にありがとうございます。

この度、由良子供会連絡協議会の会長を務めさせて頂く事になりました。

子供会に入って日が浅く、何分力不足ではございますが、他の役員の皆様の協力の下、精一杯取組んでいきたいと思っております。よろしくお願い致します。

さて、子供達がスクールバスに乗り栗田幼稚園・栗田小学校へ通い始めて、早いもので３年がたちました。

当初は子供達も、不安や期待をたくさん胸に抱えながらの通学だったと思います。

それも今では、子供達にとってごく自然な光景になったのではないでしょうか。

そして、由良・栗田という隔たりをなくし、たくさんの友達と賑やかな学校生活が送れている事と思います。

子供達は日々の生活の中で、たくさんの事を学び、たくさんの事を感じながら、毎日少しずつ成長しています。

十人十色の友達の中で、明るく、思いやりの心を持ち、そして自分に対しても自信を持つ事が出来る、そういった心の力を養っていく上で栗田小学校は、とても重要な場所だと思います。

そして、その登下校も地域の皆様のあたたかい見守りのおかげで、子供達は毎日安心して学校へ通う事が出来ています。

本当にありがとうございます。

子供会としましても、より安全に、そしてより安心して子供

達が通えるよう、地域の皆様と一体となり、出来る事をしていきたいと考えております。

さて、当協議会の行事につきましては、五月三十一日(日)に、恒例の親子遠足を実施いたしました。

今回も全地区合同で行い、姫路セントラルパークを訪園してまいりました。

親子で楽しく過ごす時間を持つ事が出来、また子供達にとっては、一年に一度のたくさんの友達と一緒に行く遠足という事で、とても楽しい良い思い出になったと思います。

今後も、例年同様当協議会また各地区での行事を、年間を通して予定しております。

ご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

最後になりましたが、由良地区の皆様にはこれからも、子供達がこの由良という自然豊かなすばらしい環境の中で、のびのびと健やかに成長していけますよう、見守り続けて頂きますようお願い申し上げます。

由良松寿会活動報告

由良松寿会 会長 **中西洋一**

地域の皆さまには、御支援、御理解を賜わり誠に有難く感謝申し上げます。この度、前会長岸田博司様の後任としてお世話になりますがよろしくお願い致します。

さて、人口減少時代において由良地区は高齢者福祉の増進が大きな課題となっています。平成二十七年四月三十日現在の由良の人口は一一〇一人となり、そのうち六十五才以上が五三七人で高齢化率は四十八.七七%、まさに二人に一人が六十五才以上ということになります。

松寿会の主な活動を報告しますと安寿足湯の運営を年間通して全面的協力を行いつつ次のような取り組みを実施しています。定期総会「年一回」日帰り旅行「市の福祉バスを利用」、京都府老人クラブ丹後ブロックゴルフ大会参加(5/28)、宮津市老人クラブゴルフ大会参加(6/5)、はまの子グランド草刈り、みかん栽培、由良・栗田ブロック交流事業輪投げ大会参加、宮津市老人クラブ連合会ユニカール輪投げ大会参加、歳末友愛訪問、新年会などに取組み、健康、友愛、奉仕をスローガンに懇親、交流を深めています。

六月二日、良い天気に恵まれ、日帰り旅行を楽しみました。紫式部ゆかりの石山寺を訪ねて石山寺は由良から約二時間、京都縦貫自動車道「七月十八日開通予定」から京滋バイパス経由瀬田川沿いを少し上ったところです。門前の志じみ潮舟にて志じみ御飯の昼食をとりグリーンのヤマモミジを散策、モミジの美しさは近江八景の一つに数えられる絶景を堪能し、豊浄殿で特別拝観「六月三十日まで」にて宝物拝観券二〇〇円で入場し、源氏物語図屏風「江戸時代」古硯「平安時代」、源氏物語「五十四帖箱入」「桃山時代」入場に際し頂いた資料の一部をしたためておきます。

〝今宵は十五夜なりけり〟

物語の執筆を依頼された紫式部は、石山寺に籠もって想いを練ります。折りしも十五夜の満月が昇り、琵琶湖の湖面に美しく映えます。式部の頭に、ある青年貴族が心ならずも須磨の地に身を置いて、海面に映える月を眺めて都を恋しく思う情景が浮かび、とっさに「今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく・・・」と書き始め、そこから一気に長大な物語が紡ぎだされました。『源氏物語』は桐壺ではなく須磨の巻の途中から書き始められたという美しい伝説です。

地域の皆様へ

由良実業会 会長　岡本康一

由良地区の皆様には、日頃より由良実業会の会員のお店をご利用頂き、誠に有難うございます。

今回、このような機会を頂きましたので、少しばかり由良実業会の紹介をさせて頂きます。

当会は、昭和二十三年に「由良商工会」とし発足致しました。その後、宮津市への編入に伴い宮津商工会議所の傘下となり、昭和三十二年、現在の『由良実業会』と名称を変え、今に至っています。

発足から七十年近く経ち、年々会員も減り、現在は二十七のお店で会を運営しています。

昭和二十三年当時は二千四百人を数えた由良の人口も、現在は一千百人程度まで減少しています。地域活力の源であり、同時に活力そのものである人口の減少は、地域活力の減退と、悲しいですが認めざるを得ない事でしょう。

そうした背景もあり、会員の中には高齢となられ又、先行き不透明で後継者がなく廃業される方も少なくありません。私自身も、生まれ育った由良の良い所や可能性を見失い、考えが後ろ向きになっている事も事実です。

百四十年の歴史をもって由良小学校が悲しくも閉校しました。しかし、特別養護老人ホームが出来、新しい人達が由良に来てくれました。由良の魅力にひかれた人達が商売を初めてくれています。大変嬉しい事です。

由良実業会は、「会員の経営基盤の拡充、並びにその振興を推進し、併せて地域の開発と発展に寄与すること」を目的にかかげています。厳しい社会経済の中ですが、知恵をしぼり、時代の変化に対応し、必死に商売を継続する事で〝地域貢献が出来る〟と私は信じています。そして、皆様に「地元のお店で買ってやろう。使ってやろう。」との思いが、更に高まる事を願っています。

〝地域社会に必要不可欠な地元のお店〟となるべく、私たちは満足頂ける為の努力と感謝の気持ちを忘れずに日々の営みを送っています。

由良実業会は、地域が元気になる活動や、お手伝いを、今後も出来る限り行っていきます。

それが〝由良の活路、私たちの活路となる事を信じて…〟

あらためて、今後も由良実業会の会員のお店を〝御贔屓に〟よろしくお願いします。

そして、由良の明るい未来に向かって、共にがんばっていきましょう。

舞鶴海軍工廠

中西　衛

　昭和19年半ば、舞廠造機部鋳造工場の工員数は、吉村常雄技術大尉が係官となった2年前に較べて3割方多い約千三百名となっていたが、そのなかに中西茂（私の父）という徴用工員がいた。中西工員は太平洋戦争開始からちょうど2年目の昭和18年12月8日に入業した第26回の徴用工で、それ以前は綾部の郡是製糸(株)に務めていた。

　昭和14年7月8日に公布された「国民徴用令」により舞廠へも2～3ヶ月に1回の割で徴用工の入業があり、太平洋戦争開始直後の17年3月ころの入業者は第14回、そして戦争まる2年後の入業者は前記のごとくすでに第26回を数えていたのである。これら徴用工員は、応召の兵士が赤い紙の召集令状で呼び出されるのに対し、白い令状で呼び出されたことから「白紙応召」といわれ、始めは京都、滋賀、福井など比較的舞鶴に近いところの独身者が多かった。

　しかし次第に地域が舞鎮管内全般（京都、滋賀、福井、石川、富山、新潟などの各府県）に広げられて妻帯者も多くなり、なかには腕に入れ墨をした者やいまでいう〝ヤーさん〟めいた者、あるいはひどい性病持ちなどもまじるようになった。

　けれども戦局の赴くところ、彼らはそれまでの自営業や会社勤めの生業を振り捨て、全く異なる仕事をさせられたうえ、外地へ行ったり、工作艦に乗り組んだりして、ついには戦死した人もいるのである。

　これら徴用工は、配属された各工場で短期間に仕事に習熟するよう厳しい実技練習が課せられ、また「団体訓練」と称する軍隊並みの体育訓練も行なわれた。この団体訓練は、各部とも実習士官か若手士官の仕事とされており、延べ1ヶ月ほどのその訓練が終わると、仕上げは「行軍」と称して工廠から10キロほど先の松尾寺、金剛院、与保呂の水源地などへ出かけた。世間では甘味料が少なくなりかけていた昭和17年の夏ごろでも、この辺にはまだそれが沢山あったからでもある。

　行軍先ではよく野外演芸大会をやった。

　岩下登氏の体験では、あるときなど次から次へ越中オワラ節ばかりが出て弱ったことがあるという。

　同じ地方の人々を集めたのだから当然のことだが、おかげで岩下氏はいまだにオワラ節中毒の後遺症が残っているそうである。

　ところで昭和15年から終戦まで、造機部の人事係には兼務とはいえ武官の係官がずっと配置されていた。薮田東三、斉藤俊夫、岩下登の各武官がそれで、主務はいうまでもなく造機部長の副官的仕事だったが、薮田、斉藤両部員の時代、つまり昭和15年から18年にかけては多数の徴用工採用があったため、その方面の仕事が非常に多かったといわれる。

　ともあれ前記の中西茂氏はこのように徴用工の採用が多かった昭和18年12月、郡是製糸の10人ほどの中堅社員とともに徴用され、鋳造工場の鋳鋼品を造る鋼（はがね）場に配属された。だが、商業学校を出て以来、郡是製糸の事務系の仕事ばかりしていた中西氏にとり、初めて見る6トン電気炉の紅蓮の炎は地獄の火さながらに思えたし、土ぼこりで視界も定かでない職場環境に辟易させられた。天井を走るクレーンの騒音に悩まさ

れ、そのクレーンから重い鉄枠や製品が落下してときに怪我人が出、肝を冷やしたりした。

　そんな環境下ながら中西工員は、自己の仕事に精を出した。その仕事というのは、①鉄製の鋳型の中に木型をはめて砂を詰め、②木型を抜いたあと桂石の粉を詰めて黒砂糖の水を塗り、③上下の枠を合わせてその中に湯（溶けた鋼）を注ぎ、④冷めたら枠を壊して製品を取り出す、というものであった。

　中西徴用工の宿舎は、西舞鶴の天台工員宿舎であった。３ヶ月の訓練期間中は毎朝４時半に起床し、宿舎の庭で教練を受けたのち、中舞鶴の工廠まで１里（４キロ）の道を作業服、巻脚絆、ゴム長靴でみんなと一緒に隊列を組んでかよった。

　午前７時の始業時には工場の前に整列し、スピーカーから流れてくる宿直高等官の発声に従って、「一、忠順誠実、一、恪勤精励・・・・」以下の「工員服務綱領」を声高に唱和し、さらにまた、「我が工場は乙旗の戦場にして、大和魂の道場なり。故に我等が勤労には厳として礼あり、粛として和あり。御稜威（みいず）のもと、我等が赤誠を凝らして一発轟沈の弾となし、百戦不沈の艦となさん」という「要言」も唱和した。

　この年も年頭にタバコの大幅値上げがあり、１箱15銭の「金鵄」が一挙に23銭へと５割以上の値上げとなって人の心もフトコロも寒からしめた。そして中西氏の入業ほどなくして本当の寒い冬がやってきた。

　工場で一番新米の中西徴用工は、終業時にみんなの手桶に水を汲んでやらねばならなかったが、寒い時期とても手の甲にあかぎれができ血が吹き出した。

　もともと事務係の社員だった中西氏は「こんなことでは体が保たぬ」と、知り合いの上司に事務所勤務となるよう働きかけを始め、幸いに鋼（はがね）場から鋳造の事務所勤務となった。

　それと同時に天台の工員寄宿舎から古巣である綾部の郡是製糸の社宅に引き移ったが、朝の７時までに工廠へ入るには４時20分に起きねばならず、２時間残業をして帰ると夜の９時過ぎでないと自宅に着かない。

　綾部からの通勤も楽でなく、郡是製糸へ帰れる当てもないと思った中西工員は綾部の社宅を引き払い、丹後由良の生家へ帰った。しかしそこからの通勤時間も綾部時代とほぼ同じで、ほとんど恩恵は受けられなかった。

　この様に通勤は苦しかったが、鋳造の事務所勤務となった中西徴用工は「水を得た魚」のように張り切り出した。仕事は工員の加給計算、採用、解雇の手続き、応召者の手続きなどで、このうち「応召者の手続き」というのは、工場の優秀な工員や技術者が陸軍へ召集されないよう半年に一回くらい舞鎮長官から陸軍大臣あてに申請書を提出することであった。

　中西工員自身、この「召集延期」を適用されて陸軍への召集を免れ、また工員の「健康保護者」にもなっていた関係上、気を張って勤務したので身体も丈夫になった。

　さらに鋳工員は重労働従事者ということで、米の配給は一番多い「甲」であり、給料は工廠の賃金のほかに政府から月90円の補給金がもらえた。その上、郡是製糸からの給料もあったので毎月の合計額は２５０円ほどになったが、そのころはすでに買うものは何もなく、いたずらに貯金だけが増えていくというありさまであった。

　いずれにしても中西氏にとり徴用されたことは打撃だったけれども、あれこれ考え合わせて「徴用されてよかった」とさえ思うようになった。

　昭和20年は大雪の年であっ

た。その豪雪の一月に舞廠機械工場の係官、川井彰技術中尉はここの福井高工機械科に学んだ身ながら大雪に驚きつつ福井駅へ降りたった。駅の南西約一キロの足羽山（あすわやま）へ向かって歩いた。足羽山は標高116メートルの塊で、その麓から地下にかけては、千五百年ほど前の人皇第26代継体天皇の時代から掘っていたと伝えられる「笏谷石（しゃくたにいし）」の採石跡がある。

ここ数年放置されたままのこの廃坑を、舞機部長、渡辺敬之助大佐の英断により、空襲にも絶対安全な地下の一大疎開工場とすべく、舞機製缶工場部員、広野英一技師が前年の末から現地測量に当たっており、いままたその広野技師を援けるため、川井中尉が福井勤務を命ぜられたのである。半年、突貫工事で地下工場を作り5月15日竣工式を挙行した。正式には「福井第五五工場」と命名された。工作機械の台数は50台、従業員は50名から100名と推定される。

7月19日福井は米軍機B29の大空襲に見舞われた。広野英一技師が34歳で戦死をして大打撃を受けた。この笏谷の洞窟は昭和23年の福井地震でかなり壊れ、その後さらに崩壊が進んだので、ここを観光洞窟として売り出す予定だった福井市でもついに断念し、入口を塞いでしまったそうである。

昭和20年7月29日、土佐沖に来襲した米機動部隊の艦上機2機による500キロ爆弾により、たった一発の投下で、海軍の技手や工員、動員学徒とその引率教師など約90名が痛ましい犠牲となった。

戦争末期に空襲を受けた内地の海軍工廠で、人的被害が最大だったのは豊川海軍工廠だといわれている。同工場は昭和20年8月7日の午前、B29の大編隊によるいわゆる「じゅうたん爆撃」で従業員、学徒、女子挺身隊員等二五四四名の尊い命が奪われたのだが、このときの爆弾、焼夷弾の数量や大きさははっきりしていない。しかし種々の仮定のもとに計算すると爆弾一発当たりわずか一人前後の犠牲にとどまる。人的被害最大といわれる豊川工廠ですらこのような状態であるのに対し、舞鶴の場合は五百キロ爆弾たった一発で90人もの死者である。何ともいいようのない悲惨事であった。造機部の鋳造事務所にいた徴用工、中西茂氏は不気味な警戒警報のサイレンとともに物凄い爆風が事務所に吹き込んできたので「これはただごとではない」とコンクリート製カマボコ型事務所の鉄の扉を閉め、みんなと一緒に床に伏した。そのころ同工場の事務所は従来の木造建物に代わって、分厚いコンクリート製カマボコ型のものになっていたのである。そのコンクリート製事務所のなかで伏せた中西工員だったが、その後は何の物音もしない。恐る恐る外へ出て見ると、鋳造工場の2棟の建物はトタン屋根を吹きとばされて、青天井となっており、横の機械工場、鍛錬工場はいわずもがな工廠内のトタン屋根というトタン屋根はみな吹きとばされていた。人の話ではちょうど黒いチリ紙を撒き散らしたようにトタン板が空に沢山舞い上がっていたという。（中西茂氏編『鋳造工場の想い出』）

この日の爆弾は工員の出入口である職礼場の近くの崖、つまり造兵部の地所内に落ちたので、同部は人的にも物的にも最大の被害を受け、しかも犠牲者のなかに多くの男女動員学徒が含まれていた。

昭和20年11月30日に舞廠は海軍省廃止とともに終了した。最盛時には本工、徴用工、動員学徒、女子挺身隊員などで4万人にも膨れ上っていた工廠の全従業員も二千五百人に激減していた。

舞廠建造の高速駆逐艦島風（2代目）
昭和18年5月5日、宮津湾外の標柱間を全力航走中のもの。波形としぶきが35ノット艦といちじるしく異なる
2015/05/08

明治34年10月1日
「舞鶴造船廠」
明治36年11月10日
「舞鶴海軍工廠」
昭和21年4月
飯野産業（株）舞鶴造船所
昭和38年
舞鶴重工業（株）
昭和46年
日立造船（株）
平成14年
ユニバーサル造船（株）
平成25年
ジャパンマリンユナイテッド（株）

参考
舞鶴造機部の昭和史
岡本幸太郎　文芸社

『京の蘭方医』新宮涼庭伝

新宮涼輔

（頼山陽と涼庭）

山陽が没した時、涼庭は左の一篇を作っている。

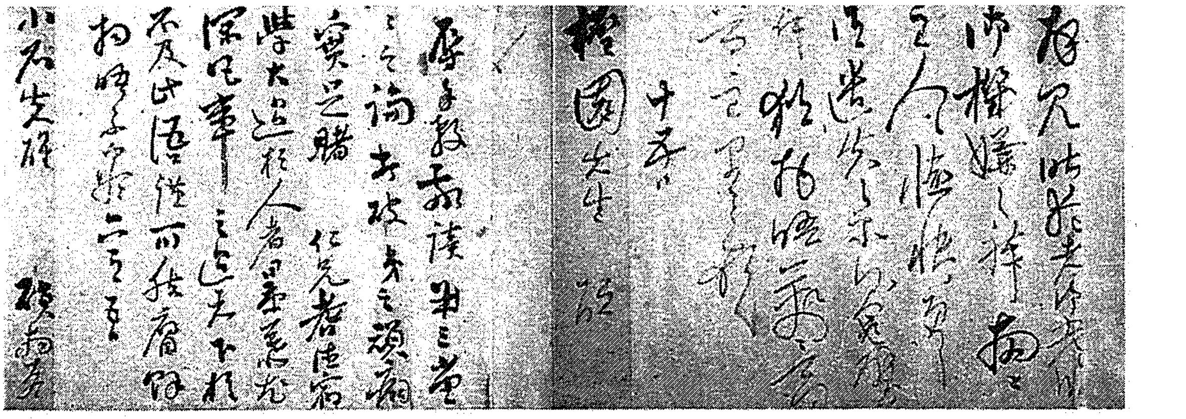
哭頼先生
連年の肺患素と医し難し
痛想す先生喀血の時
一燭熒々風雨の夜
壁間空しく見る丹を乞うの詩

右大意は、連年の肺病は不治であった。先生喀血のとき、風雨の夜自分は治療に行った。そのとき、灯りにより壁をみたところ、丹（精製した薬）を乞う詩がかかっていたが、当時のさまをいたましくも回想するというのである。

（涼庭と小石元瑞）

※小石元瑞＝（天明四年・一七八四～嘉永二年・一八四九）元俊※の子。幼時より父の厳格な教育を受け、一時大槻玄沢の教えをうけた。父の死後その学塾究理堂をうけ、京洛の名医として活躍した。頼山陽も、父が元俊と交わったところから、元瑞を頼って京都に来り、その世話になった。山陽の妻は元瑞の女中であり、これを小石家の養女として山陽に嫁がせた。

※小石元俊＝（寛保三年・一七四三年～文化五年・一八〇八年）元瑞の父。本姓は林野、父が小浜藩の待遇に不満で出奔し、小石と改姓、父は各地を転々としてのち大阪に住んだ。元俊は京都の桂村で生まれている。元俊は解剖にすぐれ、山脇一門の解剖には、つねに元俊がその中心であった。元俊自身はオランダ語を読めなかったので、大阪の町人天文学者間重富と相談して、寛政二年（一七九〇）橋本宗吉を芝蘭堂に入門させ、のちには門人斉藤方策をも芝蘭堂へ入塾させている。また寛政十一年（一七九九）には子元瑞を伴って第二回の東遊を行ない、滞在間元瑞（当時十六歳）を芝蘭堂に入れている。元俊が第一回の江戸行きから帰った年に新宮涼庭は生まれたのである。小石家には、涼庭の元瑞あて書翰三通があり（※写真）、また元瑞の日録（内容は食事、訪客などの欄に区分されている。）によると、間々涼庭との往復が見られる。書翰の一は、七月十一日付のもので「客躰は夜に入って安静肺炎かと思う。御見込には感心した。先達ても大棗草閑熱の薬で快方に赴いた。その後肺の薬のみで治療しているが、又早々に御趣意の薬を試みてみる」旨のことが書かれている。年次不明であるが、天保三年（一八三二）七月十四日付元瑞宛の山陽の書翰では、喀血後一ヶ月目に血痰があったことを述べているので、この頃のものではないかと思う。



涼庭書翰（小石元瑞宛）　（小石秀夫氏蔵）

（遊行）

涼庭は医業もさかんとなり、洛中に名を知られるようになると、文人墨客との交渉をもつようになった。京都は名所の多いところであり、そのうえ、化政時代の余風をうけて、彼らはともに名所に月雪花をめで、詩歌にその感懐を託した。涼庭がいつ、誰とどこに遊んだかの詳しいことは明らかでない。いま『駆豎斎詩鈔』がほぼ年代順に配列されていると思うので主要なものを記してみよう。天保三年（一八三二）涼庭（36歳）はその感懐を詩に託した。

　簪纓繋がず自由の身
　我は是れ昇平鼓腹の民
　一縷の竈煙四十を過ぎ
　煉丹香裏又春を迎う

宮に仕えなかった涼庭にとっては（簪は冠をとめるための髪のもの、纓はひも、転じて官吏の意味。）まさに自由の身であり、昇平鼓腹の民である。ときに涼庭年四十六歳である。この詩について、「雙林寺途中作」

「仁和寺」「嵐山途中口占」「嵐山に宿す」「嵐山の帰路」の詩があるので祇園円山の雙林寺、御宝の仁和寺を経て嵐山にいたり、ここに一泊したことが明らかである。「雙林寺途中作」に、

　宿雨初めて晴れて暖烘くに似たり

　菜花薫徹す午天の嵐。

とあり、「仁和寺」に、緑亭々たる中に山桜が風に馨を弄ぶとあるから、春もたけなわの長雨のちに、やや遅咲きで名高い御室の桜をめでつつ、嵐山へ桜と新緑とを賞しに行ったようである。嵐山の途中は翠竹叢間に寺が見え、黄花堆裏に渓流が音をたてていた。雨は近く雲は低くたれて嵐山も十分見えなかったらしい。嵐山に宿して寄松怪石を見、世塵を洗う渓流に心まで洗われ、春を惜しむ人々の来るのをみて一泊、翌日は一日近傍の佳景を賞で、処士（官に仕えない者）の尊きを知り、天竜寺畔黄昏こめるころ帰路についている。

（内外情勢と凉庭）

松平定信が老中となったのは天明七年（一七八七）で、ついで寛政の改革が行われた。朱子学以外の儒学は異学として弾圧され（寛政異学の禁）、また林子平は寛政四年（一七九二）、前年に出版した『海国兵談』が世を迷わすものとして処罰された。改革は急にすぎて、むしろ前代の田沼時代を追想するのもあった。しかし、林子平が処罰されてから四ヶ月後、ラクスマンは最初のロシア使節として根室に来り、さらに翌年には松前に来た。幕府は、従来注意しつつあった北辺に、いっそう注意しなければならなくなった。文化元年（一八〇四）・（凉庭十八歳）には、ラクスマンのあとをついでレザノフが長崎に来航したが、幕府は通商を拒否したので、文化三年（一八〇六）にロシア人が北海道でわが番所を襲撃して焼き払うという事件がおこった。この間、定信は辞職したが、松平信明によって、定信の政策は守られていた。しかし、外交問題はいよいよ急を加え、文化五年（一八〇八）には、イギリスの軍艦フェートン号がナポレオン戦争を利用して長崎の蘭館を奪おうとし、長崎港に入って乱暴を働いた。文政八年（一八二五）・（凉庭二五歳）には、外国船打払令が出され、沿岸に近づく外国船は、二念なく砲撃すべきことが令せられた。文政十年（一八二七）には、シーボルト事件※が起こった。これを機に、幕府は蘭学者に注意しはじめた。シーボルトは国外追放となり、蘭学者の一部は処罰された。

※シーボルト事件＝シーボルトは長崎の鳴滝に塾をひらき日本の学生を教育して、日本の蘭学発展史上一新紀元を画したが、その反面、日本の学生からいろいろの知識を得、また高橋景保から国禁の日本地図、土生玄碩からは将軍から下賜された葵の紋入りの衣服をもらった。シーボルトが任を終えて帰国する時、長崎港外で突風にあい、船は岩にのしあげて沈没した。

もう一つ文政十二年（一八二九）・（凉庭四三歳）には大阪でキリシタン婆福岡貢が検挙され、蘭医藤田顕蔵も同罪として磔刑に処せられるという事件がおこり、蘭学者に対する警戒は厳しくなった。しかし、文政年間は化成時代のうちでもとくに華やかな時期であった。将軍家斉は政治に、飽いて奢侈にふけり、上下をあげて泰平を謳歌した。まさに江戸時代最後のデカダンの時代であった。下級武士は困窮し、農民は重税にあえいだ。その上、天保期には大飢饉があり、各地に百姓一揆や打ちこわしがおこった。なかでも、天保八年（一八三七）の大塩の乱は、幕府の頽勢を明瞭にしめすものであった。この年、将軍家斉は四十五年にわたる将軍職を辞し、第十二代の家慶に職をゆずったが、なお大御所として実権をにぎっていた。したがって、老中水野忠邦も、家斉在世中は

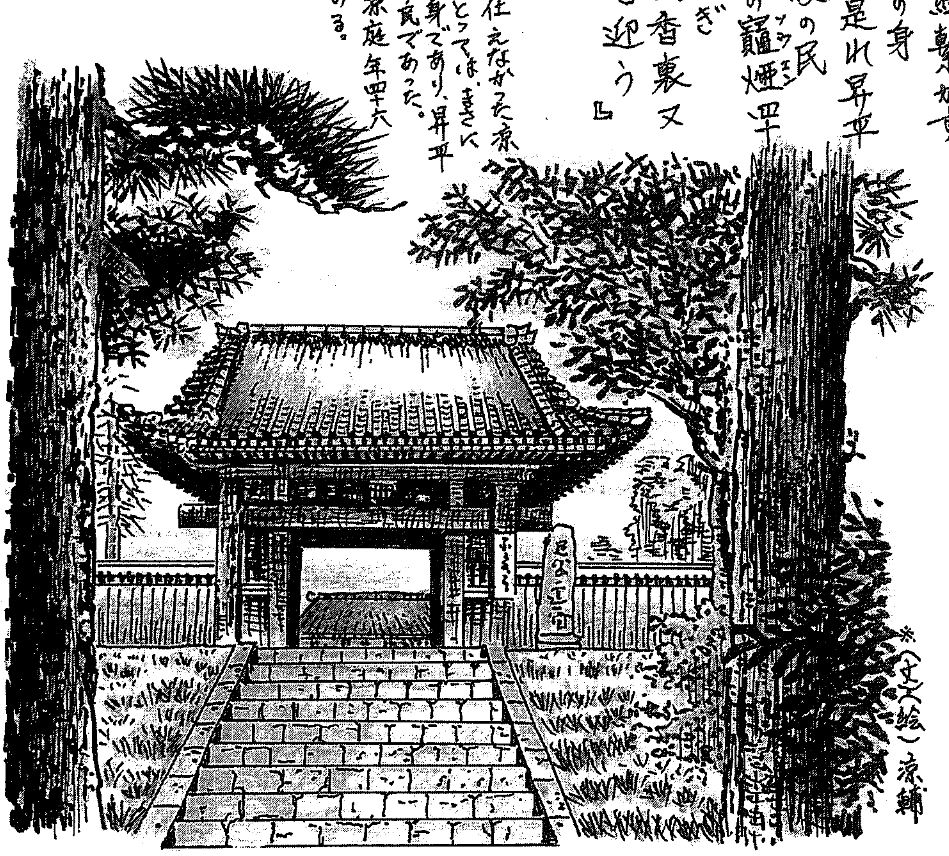
改革に着手することが出来なかった。天保九年（一八三八）・（涼庭五二歳）にはモリソン号事件がおこった。モリソンとは、前年浦賀、鹿児島に来て襲撃された船の名であるが、オランダは一年後に、しかもアメリカをイギリスと間違えて報告した。長崎よりこの報に接した幕府は、いそいで相模・伊豆海岸の派視を命じ、地図を作製させた。この際、はからずも水野忠邦（みずのただくに）の配下の鳥居耀蔵と蘭学者で伊豆の代官であった江川太郎左衛門の製図競争となり鳥居は江川に及ばず、面目を失した鳥居は、大いに江川にふくむところがあった。一方、蘭学社中では英人モリソンが中国に来ていることを知っていたから、モリソン号と、モリソンとを混同し、モリソンが軍隊を率いて日本に攻めてくるであろうと考え、海防の論が俄然さかんとなった。高野長英や渡辺崋山（わたなべかざん）、さらに昌平校の儒者古賀侗庵らが海防の急や開鎖の論を革したのは、かかる背景による。一方鳥居耀蔵は蘭学者にふくむところがあり、長英、崋山らの会同に密偵をいれて彼らが無人島に渡航を企てているとし、これを一せいに検挙した。これが天保十年の蕃社の獄で、涼庭が順正書院を建てた年である。（一八三九）三月この年、幕府は蘭学医師に奇異の節を唱えぬように示諭するところがあった。翌一年にも、天文方へ蘭書を翻訳するものは暦書・医書・天文書・窮理書（科学書）類を関係者以外に世上に流布せしめぬようとの注意があった。天保十二年（一八四一）・（涼庭五五歳）家斉の死後に忠邦（ただくに）の天保改革がはじまり蘭学の取締りは一層厳重となった。蘭学者は以後国防上の蘭書翻訳に力をそそぎ、封建体制を破るべき可能性をもった蘭学もついに封建制を補強する学問へと転化していったのである。

（文）・（絵）新宮涼輔

(遊行)京庭は、医業もさかんとなり、洛中に名を知られるようになった。京都は、名所の多いところであり、そのうえ、化政時代の余風をうけて、彼らは、ともに名所に月、雪花をめで、詩歌にその感懐を託した。

『簪纓繋がず
自由の身
我は是れ昇平
鼓腹の民
一縷の竈煙平
池過ぎ
煉丹香裏又
春を迎う』

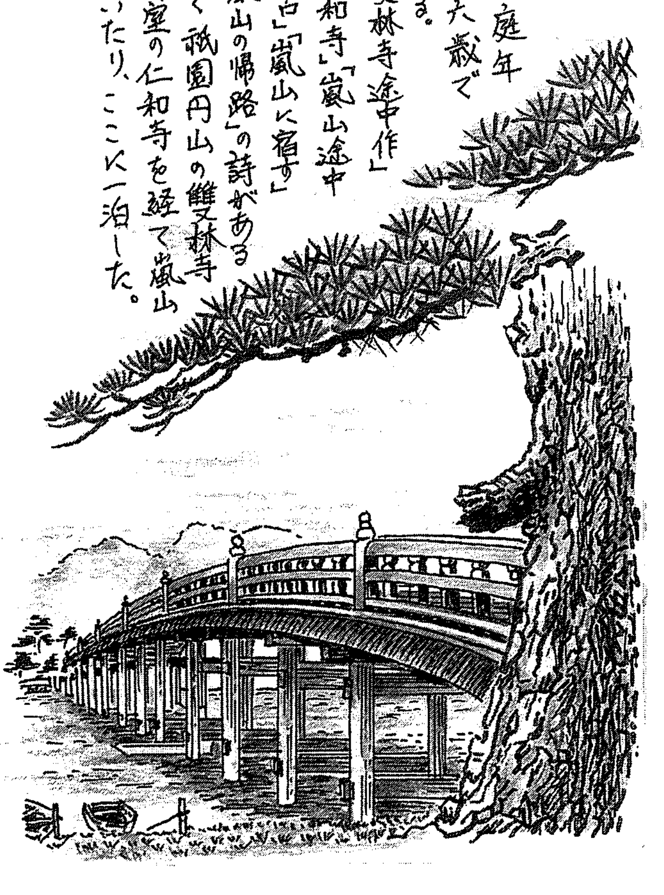
宮に仕えなかった京庭にとっては、まさに自由の身であり、昇平鼓腹の民であった。ときに京庭年四十六歳である。

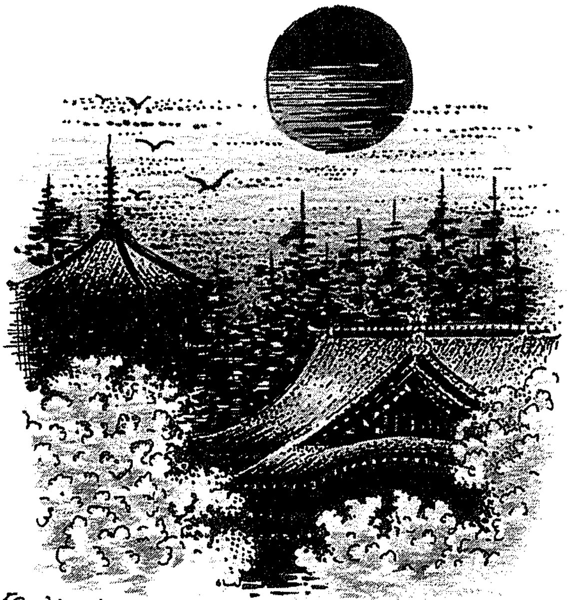


※(文・絵)京輔

京庭年四十六歳である。

『雙林寺途中作』「仁和寺」「嵐山途中口占」「嵐山に宿す」「嵐山の帰路」の詩があるので祇園円山の雙林寺御室の仁和寺を経て嵐山にいたり、ここに一泊した。





『宿雨初めて晴れて暖烘くに似たり菜花薫徹す午天の嵐。』とあり、「仁和寺」に緑亭々たる中に山桜が風に馨を弄ぶとあるから、春もたけなわの長雨ののちに、遅咲きで名高い御室の桜をめでつつ、嵐山へ桜と新緑とを賞しに行ったようである。

短歌

枡本　清

おじいチャン結婚決めたと孫娘
　はずむ電話に幸あれジジ

ゆったりと湯船につかる幸せを
　尽してくれた息子にサンキュー

由良に住み終の道でも続けたい
　運動はげみて健康長寿

久々に縫い物をと糸通し
　通らむ針のもどかし嫌い！！

初夏の昼食感シャキシャキおいしくて
　アスパラガスは旬の食材

平成26年度 宮津市人権標語入賞作品

おもいやり　みんなのこころに　さかせよう　（小学１年生）

考えよう　人の気持ちと　自分の行動　（小学４年生）

残るのは　見える傷より　心の傷　（小学６年生）

編集後記

２０１５（H27）６月

４月の中頃までは不順な天候でしたが、後半になり安定し５月に入ると暖かくなりました。

今年も無事に田植えが終わり農家のみなさんは「さなぶり」を満喫されていると思います。

「米」を分解すると八十八、米作りには八十八回手が掛ると云います。しかし丹精をこめてなお人力や人知の及ばないことは数多くあります。人事を尽くして後は太陽や雨と風など天地の恵みにすがることになります。

「瑞穂（みずほ）」とはみずみずしい稲穂のこと（広辞苑）。秋には黄金色の稲穂がたわわに実ります。瑞穂国とはそんな豊かな日本国の美称。日本国にとって「米」の重さは特別と思えます。ＴＰＰが瑞穂国にとって打撃をあたえることなく解決をしてほしいと考えています。

（枝川）